

日本歴史地理学研究会・歴史地理学会に関する所感

黒崎千晴



日本歴史地理学研究会と歴史地理学会には、私は初期のころから紀要や会誌の編集などを通じて長く関わりがあった。

日本歴史地理学研究会は菊地（利夫）さんが創始したものである。

会の設立に向けて菊地さんがどなたと相談されたか詳しいことは知らないが、三友（国五郎）さんや松村（安一）さんあたりではなかろうか。浅香（幸雄）さんは会との関わりはあったが、準備段階や発足初期のころにはこの会にそれほど深く関わってはいなかったように思う。内田（寛一）先生がこの会の設立にどのように関わったかは、記憶が鮮明ではない。

歴史地理学という学問の実質的なパイオニアは内田先生である、と私は考えている。内田先生は厳しい方で、ものごとを簡単には認めようとされなかった。しかし、コツコツと仕事をしている人を正当に評価しておられた。この当時、内田先生と異なる学問観の地理学者がおられたが、私は内田先生の学問が理論的であると考えている。

私の研究上の関心は初めは近世であったが、全国を共通の基準によって展望したいという意図が強まり、しだいに統計を利用した近代化期の歴史地理学に移行した。しかし、今日と異なり、明治期統計の所在や資料吟味の道筋にはまだ定見が乏しく、さまざまなことがらが開拓途上という時代であった。日本歴史地理学研究会のかつての雰囲気振り返ってみて、明治期の歴史地理学研究に関心

を持った人はいたと思うが、みな徐々に手を引いてしまったという感じであった。いま考えると、日本歴史地理学研究会の初期のころは、各人がそれぞれ自分の思う歴史地理学や地理学を模索しているという状況であったように思う。

今日の歴史地理学会を見ると明治期を対象とする研究者も増え、時の流れを感じず。会員がそれぞれ自らの課題解明に向けて研鑽を積むのは結構なことであるが、しかし、時には歴史地理学の研究者が力を合わせて解明しなくてはならない課題がまだ残っているように思われる。その一つとして、江戸期における日本の全体像、すなわち全国の姿を描くという課題が存在するのではなかろうか。

内田先生は江戸時代を対象とした歴史地理学研究を手がけられ、貴重な成果を示された。しかし、それらは内田先生が関心を持たれたことがらや地域だけを調べられたのであって、江戸時代の日本について全国の姿を提示されるまでには至らなかった。その後の歴史地理学において、内田先生のほかに江戸時代を対象とした貴重な研究成果がいくつも提示された。それらは個々には極めてすぐれた研究成果であるが、テーマや地域は限定されたものであった。そのため、それらの成果を踏まえたとしても、今日の研究水準は江戸時代の日本について全国の姿を描くまでには到達していないといえよう。

明治期日本を対象とした歴史地理学研究においては、徐々にではあるが、全国の姿が描ける段階に研究の水準が到達したといえる。学会では、力の結集も必要である。今後は、歴史地理学会の人々が力を合わせ、江戸時代の日本における全国の姿が提示できるよう研

究が推進されることを期待している。

(名誉会員)

注：本稿は2006（平成18）年11月25日に実施したインタビューの要約である。インタビューの聞き手は中西僚太郎（千葉大）と小口千明（筑波大）が担当し、文章化は小口がおこなった。

〔追記〕

黒崎千晴先生は、惜しくも2007（平成19）年6月15日に逝去された。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げる次第である。